

日本社会心理学会会報

198号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル 同志社大学社会学部 池田研究室

2013年6月10日

第27期役員を紹介 会長就任あいさつ

村田光二

このたびの役員選挙で日本社会心理学会の会長に選出され、これから2年間の任期を務めさせていただくことになりました。諸先輩、会員諸氏の継続的な活動によって本学会は大きく発展してきましたが、今後のさらなる発展を期して、微力ながら会長としての役割を果たしたいと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

私は、良い研究を生む出す仕組みとしての社会心理学会を目指していきたくと考えています。何が「良い」研究なのか判断は難しいですが、社会心理学会の外の世界に対して望ましい影響力を持つことが、重要な判断基準となると考えています。外の世界として第1に考えたいのは、他のアカデミックな世界です。社会心理学がクロスロードにあることを考えれば、心理学や社会学もひとまずは外と考えることができますが、それ以上に、法学、経済学、経営学などの社会科学、そして自然科学や社会技術の世界に対してです。もちろん、現実社会への貢献はとても大切ですが、それをかなえるためにも他の諸学問に貢献できることが望ましいと思っております。知的世界の中で一定の敬意を抱かれることが、社会心理学ワールドの社会的基盤を造っていくのではないのでしょうか。

社会心理学会は知的関心を共有する専門家の集団ですし、その役員や委員は組織を構成しています。ただ、ここでは適切な用語法かどうか自信がありませんが、「仕組み」としての社会心理学会を考えたいと思っております。そう考える理由の1つはこの集まりを実体化することは難しいし、しなくてもよいと思うからです。法人格をもっていない団体ですし、専従の人がいるわけでもありません。役員はボランティアとして活動を支えていて、研究・教育という本業へ割くことも可能な時間や労力を投入しています。会員の一定比率は入れ替わっていますし、この集まり以外のところでも社会心理学研究を続けることも可能だろうと推測します。何より、良い研究するのは個々の会員ですし、会員によるチームやプロジェクトです。学会は研究活動を指示したり、規制したりするものではなく、良い研究ができるための社会的環境の1つであり、広くその環境を整備する役割を担うものだと思います。

ただ、この「仕組み」に内包できないかもしれない2点について付け加えたいと思っております。その1つは、よい研究ができる研究者を輩出する仕組みを考える必要があることです。これは、個々の大学院組織が担う博士号取得までの研究者輩出のことでなく、プロフェッショナルとなった若い方が研究活動を持続、発展するための仕組みのことです。大学に就職した若い研究者は、教育上そして大学運営上の多くの仕事に追われています。事務能力が高く、社会的スキルも高い人はなおさらです。こういった人たちが研究時間や資源を確保する制度的基盤は乏しいものです。この日本の学術世界の現実に抗することは難しいと思っておりますが、少なくとも研究への意欲を維持高揚できる仕組みを、社会心理学会のネットワークの中に構築したいと思っております。

もう1点は、役員等としてこの仕組みを維持する人材の育成も必要なことです。今回の常任理事会メンバーには、私を含めて3人の「2007年委員会」元メンバーがいます。この委員会は1997年頃に、日本社会心理学の将来を見据えて、選挙制度や財政の改革を提言しました。それが受け入れられ、役員に任期が就き、理事や委員の形で学会運営を経験する層が広がりました。しかしながら、その中心となるメンバーには、交代しながらも一定年齢層の人たちが繰り返し着任している傾向が見受けられます。学会運営の時代を担う人材として、もっと若い年齢層の人が登場してきてほしいと思っておりますし、分担しながら運営を担う人たちが現れ続ける仕組みを考えたいと思っております。

上記の改革が行われた時代に、社会心理学会はいち早く事務作業をアウトソーシングするなど、学会運営の効率化を図ってきました。そのおかげで、常任理事にしろ、それを支える幹事にしろ、一定程度は雑務が軽減されました。この恩恵は大きいと思っております。しかし他方で、そういったある種の苦役を担うことで身につけたかもしれない、学会に対する愛着感や誠心も乏しくなっているように見受けられます。すでに成熟期に達しているかもしれない社会心理学会では、他の比較的若い学会に比べて、学会運営にコミットする機会が減少しているのではないかと懸念します。先述の点と関わって、会員が学会活動にコミットする機会を増やすことを考えたいと思いま

● 今号の主な内容

【1面】 第27期役員を紹介と挨拶

【4面】 第27期役員選挙結果報告

【6面】 第27期常任理事会・各委員会の体制

【6面】 第26期常任理事の離任の挨拶

【10面】 若手会員、声をあげる

【11面】 社会心理学を支えていただいている方々：その8

【13面】 会員異動

【14面】 編集後記

す。

他方で、大会は異様なほどの盛り上がりを見せています。参加者も発表数も多いですし、議論も活発だと思います。特に懇親会の盛り上がりはかなりのものではないでしょうか。しかしながら、主催校の負担は多くなって、開催には困難が伴います。大会運営委員会を学会に常置して問題への対処を行っています、会員の皆さまからのご協力、ご助力も期待します。心配な点ですが、大会での研究発表の質はどうでしょうか。内容の多様性からいって簡単に評価を下せるものではありませんが、学会発表が学術論文の発表につながっているのかと考えると、(自戒を込めて言うことですが) 十分とは言えません。学会員の方がもっと学術論文の発表を増やす形で、社会心理学の研究成果をアピールしていただけるとありがたいです。同様に、社会心理学会大会だけでなく、他の関連学会でも社会心理学研究の魅力をアピールする発表やシンポジウムなどの企画をしていただくと良いと思います。内輪の盛り上がりは大切ですが、外で武者修行できる研究者が増えることも大切だと思います。

いろいろと、偉そうなことを述べてしまいましたが、会長就任にあたって私の現状認識と希望を申し上げます。一會員の視点を忘れずに、會員の皆さまとともによりよい仕組みを目指して2年間務めたいと思います。 (むらたこうじ・一橋大学)

第27期の常任理事就任挨拶

事務局担当

岡 隆

このたび27期の事務局長の任にあたることになりました。村田光二会長からの指名と理事による信任に基づいて、お引き受けいたしました。数年前、同規模の別の学会の会長の任にあつたときに、その事務局長が淡々と仕事をこなされていまして、高を括ってくくっていました。冒頭から恐縮ですが、お引き受けしたことを後悔しています。4月と5月の2か月間だけで700通ほどのメールや電話です。このなかには、常任理事会や理事会のメーリングリストでさっと目を通すものも多く含まれますが、過去の議事録や会務報告や会報などを調べて各種規程や申し合わせや前例に照らして難しい判断をしなければならないものも含まれます。自分の非力を痛感するとともに、おそらく、こういった仕事を淡々とこなしてこられた第26期の事務局長、今井芳昭先生に脱帽の思いです。私にとっては心強いことに、今井芳昭先生は、渉外担当として常任理事に留任されましたので、当分の間はこの影の事務局長から手ほどきを受けるつもりです。

学会事務局のルーティンは、会勢の管掌と、総会や常任理事会、理事会の開催と、他の5担当が管掌しない諸々のことと理解しています。会勢は、2013年4月25日現在、一般正会員1,410名(2011年4月22日、1,342名)、院生正会員365名(同431名)、合計1,775名(同1,773名)です。2年前と比べて一般正会員は70名ほど増えています、院生正会員が同じ数だけ減っています。第1回常任理事会は4月29日に開催され、近日中にその議事録が本会サイ

トの会員ページに掲載されます。第2回は6月23日に予定されており、以降2か月に1回の割合で開催される予定です。11月2日~3日に沖縄国際大学を会場にして開催される第54回大会期間中には、理事会、総会が予定されています。

第26期の常任理事会および事務局長から、今後の課題を引継ぎました。まず、会則、諸規程の整理があります。会則や諸規程間で整合化をはかること、また、これまで申し合わせや取り扱いですまされていたことの規程化についてその是非を含めての検討です。第2に、会員名簿のありかたの検討です。具体的には、2012年版は氏名と所属のみの記載となっていますが、これにメール・アドレス等を追加することの是非についての検討です。第3に、役員選挙時期の見直しです。現在のスケジュールでは、常任理事が決定されるのが3月下旬で、直後の4月からの執務となります。期変わりのスムーズな移行のためにも、選挙時期の前倒しを検討します。最後に、事務局資料の整理です。あまり開封された形跡のない段ボール箱7~8個が、事務局長が代わるたびに、その数を増やしながらか、運送されます。古い資料の整理、pdf化、保管倉庫の利用を含めての検討です。これらの課題について、ご意見をお寄せくださると幸いです。

私にとって最も心強いのは、国際文献社の古川佳奈さんが何期にもわたって本会を担当してくださっていることです。日常の業務をサポートいただくだけでなく、前例や慣例に困ると、まるで生き字引です。事務局幹事の日本大学大学院人文学研究科博士後期課程、山本真菜さんのお力添えも頼

もしいかぎりです。任期は2年ですが、本会の運営が円滑、かつ発展的に進むよう微力を尽くしたいと存じます。どうぞご協力賜りますようお願い申し上げます。

(おかたかし・日本大学)

編集担当

浦 光博

『社会心理学研究』の編集を担当することになりました。

私自身は大学院生であったことと同じくまだまだ未熟者だと思っていますし、実際に未熟者なのですが、どうも周りにはそう思ってくださいらないようで、最近何かと責任を伴う仕事が降ってきます。そんなとき、生来気の弱い私は「ノー」と言えなくて、受けてしまいます。今回もそんな感じですが、

とは言え、引き受けるに当たっては、それなりのミッションを自分自身に課しました。まずは、歴代委員長のご努力により実現してきた順調な刊行状況と審査の迅速化の流れを維持、進展させることです。これは本誌の質のさらなる向上にとって必須の課題であると考えています。

次に「誰でも引き受けられる編集委員会」の実現を目指します。私が引き受けた時点で、これは半ば実現したも同然ですが、會員のみなさまは、編集の仕事はずごく大変で、自分では編集委員も、ましてや委員長などとても引き受けられないとお考えかもしれませぬ。しかし、そんなことはありません。現在は電子投稿システムが順調に運用され、編集事務局をお引き受けいただいている国際文献社の担当者との緊密な連携のもと、編集業務は大幅に効率的になり簡略化しています。これ以上簡略化したら、

編集委員長の仕事がなくなってしまうのではないかと思うぐらいです。というのは冗談ですが、さらなる効率化によって編集委員の先生方の過剰な負担をなくすことは、審査と編集の一層の質的向上のための重要な条件であると考えています。

もちろん投稿論文の審査は編集委員だけの仕事ではありません。多くの研究者の献身的な協力による質の高い審査があったからこそ、本誌のこれまでの発展があったことはいまでもありません。しかし、本誌が発展し投稿される論文の数が増えるにつれ、審査に当たってくださる方々の負担がどんどん大きくなっています。その負担を少しでも減らしてゆくこともまた、編集委員会の重要なミッションであると考えています。そのためには審査過程を大胆に見直す必要もあるでしょう。会員のみならずのご理解を得ながら、この点についての改革も進めていくつもりです。

なにやら、気が弱いくせに強気のミッションを掲げてしまい、自分の首を絞めているような気もしますが、あまり心配はしていません。すばらしい編集委員会メンバーがいるからです。副編集委員長は林直保子先生(関西大学)に無理をお願いしお引き受けいただきました。また、編集委員には、前期から引き続きとどまっていたらいてる優秀な先生方に加え、新たに経験豊富な、あるいは新進気鋭の先生方にご着任いただいています。また、編集委員会のサポート役である編集幹事は柳澤邦昭氏(京都大学、学振 PD)にお願いしました。学界の第一線でご自身も優れた業績を上げ続けておられるこれらのメンバーと手を携え、本誌のさらなる発展の一助になれるよう精進して参ります。みなさま、よろしくご協力のほどお願い申し上げます。

(うらみつひろ・広島大学)

渉外担当

今井芳昭

第27期の渉外担当常任理事となりました今井芳昭(慶應義塾大学)です。事務局長の仕事よりは軽減されるだろうと期待しているのですが...。渉外の仕事は、2つあります。1つは、毎年度、6月初旬頃に発表される「大学院生海外学会発表支援制度」並びに「国際学会シンポジウム企画補助金制度」の補助対象を選考し、それを執行す

ることです。今年度も無事、選考が終わり、既に学会ホームページには選考結果が公表されています。前者は2004年、後者は2009年に規程が制定され、今日に至っていますが、ここ数年、そのあり方について検討が行われております。今年度も引き続き検討してまいりますので、ご意見がございましたらお寄せください。

渉外担当の2つ目の仕事は、会長と共に日本心理学諸学会連合の会合に出席することです。総会において安藤清志前会長から説明がありましたように、諸学会が心理師(仮称)の制定について連携を取っていくということです。日本社会心理学会の会員の皆様の利益につながるよう努力していきたいと存じます。今後2年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(いまいよしあき・慶應義塾大学)

学会活動担当

相川 充

学会活動の担当をさせていただくことになりました相川充です。前任者は遠藤由美先生です。遠藤由美先生から、たくさん関係ファイルを送っていただきました。関係書類が入った段ボール箱が、空から次々と降ってきた感があり、圧倒されて私に務まるかどうか不安でしたが、遠藤先生からのご教示のおかげで、学会活動担当としての仕事を何とか始めております。

私が担当する学会活動の二大任務は、公開シンポジウムの開催と、若手研究者奨励賞の授与です。この二つの活動について改めてご説明します。

公開シンポジウムは、今年で第57回を数えるまでに回を重ねてきました。今年は、去る5月25日に東京未来大学を会場に「モチベーションはポジティブな人生を築く」というテーマで、角山剛先生の司会のもと、竹橋洋毅先生、戸梶亜紀彦先生、そして私の三人が話題提供をして、堀毛一也先生に指定討論者をしていただき、盛会のうちに終えることができました(なお、公開シンポジウムの担当者である私が話題提供者になってしまったのは、話題提供者のお誘いを先にいただき、そのあとで常任理事と学会活動担当が決まったからです)。ご来場くださった会員の皆様にお礼を申し上げます。当日のご報告は、この会報の次号でいたします。

公開シンポジウムは、年次大会の開催地とはできるだけ離れた場所で、これまでのテーマを考慮に入れつつ、しかも現実の社会で起こっている出来事をにらみつつ開催してきました。来年は、フェリス女学院大学の渡辺浪二先生、潮村公弘先生を中心に開催していただくことが決まっております。しかし再来年は未定です。会員の皆様の中から、ぜひ名乗りをあげてください。

公開シンポジウムの開催地やテーマ、あるいは公開シンポジウムのあり方などについて、ご意見やご要望がございましたら、私宛にお寄せください。ご意見やご要望を考慮に入れて、再来年について決定してゆきたいと考えております。

若手研究者奨励賞は、本学会の研究支援制度の一つです。規定が整ったのは2000年に入ってからですが、本学会のホームページを見ますと、1983年以降の受賞者一覧を見ることができます。これを見ると、この賞が伝統のある賞であることが分かります。

この賞の趣旨は、若手研究者(30歳以下、あるいは大学院の課程に在籍している本学会会員)の研究活動の支援です。賞金が十数万円出ます。「少ない」とお思いかもしれませんが、用途は自由で、領収書の提出も必要ありません。ただし受賞者は、本学会の大会で、受賞した研究の成果を発表していただくことになっています。

今年も、夏が終わる頃にはこの賞の募集を開始する予定です。若手研究者の会員は、どしどし応募してください。

この賞の応募締め切り時期(受賞者決定時期)、応募用紙の様式、選考基準などについても、ご意見やご要望がございましたら、私宛にお寄せ下さい。

学会活動は、会員相互の協力で成り立っております。皆様の積極的なご協力をお願い申し上げます。

最後に私事で恐縮ですが、私は20年間に職いたしました東京学芸大学を退職して、この4月から筑波大学に勤務しております。筑波大学での研究や教育に、また、本学会での活動に、最善を尽くす所存です。今後とも引き続きご指導くださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(あいかわあつし・筑波大学)

広報担当

池田謙一

第27期の広報担当常任理事をさせていただきます。26期から引き続きの担当となります。これまであれこれ学会業務を担当させていただきましたが、この広報担当が最長になることが決定的なようです。

今期も担当させていただくのは、学会の震災サイトを一般化し、外部の目に届くように、発展させるという任務がまだ途上であること、それが大きな理由の一つです。東日本大震災の発生に対応するため緊急情報サイトとして設置された「東日本大震災を乗り越えるために：心理学からの提言と情報」は、2012年度の総会にて「学会広報特別委員会」をお認めいただき、その委員会を通じて広報委員会と協力しつつ新たにリノベーションする予定でしたが、案が考案されているだけで、まだ形をなしておりません。責任者の一人として忸怩たるところですが、今期に少しでもこれを前に進めたいと存じます。そのために異例ですが、前期の委員であり任期終了であった三浦麻子さんには重任していただくことをお願いいたしました。

いま一つの重要な任務は、学会サイトの利便性を高めることです。単に学会会員のための情報を集積している「場所」ではなく、会員および外側から訪れる非会員の方にも、社会心理学会会員がどんな研究活動をしていて、どれほど社会心理学の研究から得ることがあるか、そうした点を広報として分かりやすく情報整備し、サポートすることができれば、と考えております。このことは第一点目のリノベーションと重なって初めて意義をなすところです。

今期の広報委員は、4年任期として26期

よりの継続メンバーが小林哲郎さん（国立情報学研究所）、宮本聡介（明治学院大学）さんであり、新メンバーとして清水裕士（広島大学）さん、そして形式上新メンバーではあるが重任の三浦麻子（関西学院大学）さん、また広報幹事も重任していただいた范知善（東京大学大学院）というメンバー構成で参ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（いけだけんいち・同志社大学）

大会運営担当

村本由紀子

今期、常任理事として大会運営に関わるお仕事を担当させていただくことになりました。その主たるミッションは、社会心理学会の年次大会をお引き受けくださった主催校側と緊密な意見交換・情報交換を行い、大会の準備および実施に際するお手伝いをさせていただきますことです。ご存じの通り当学会の年次大会の規模は大きく、一昨年度の名古屋大会、昨年度のつくば大会にはいづれも700名前後の参加者があったとお聞きしております。こうした大人数の参加者を迎える大会が円滑に運営・実施されるには、大会準備委員会スタッフの長期間にわたるご尽力に負うところが非常に大きいというのが実情です。大変なお役目をお引き受けくださった主催校の先生方、ならびに準備委員会のみなさまに感謝しつつ、少しでもそのお手伝いができるよう、精一杯努めてまいりたいと存じます。

幸いなことに、この業務を担うのは私ひとりではなく「大会運営委員会」というチームで担当させていただくことになっています。大会運営委員は、前期から継続してお勤めいただく福島治先生（新潟大学）、山

入端津由先生・泊真児先生（沖縄国際大学：今年度大会準備委員会より）に加えて、新たに元吉忠寛先生（関西大学：理事）、大沼進先生（北海道大学：理事）、片桐恵子先生（日本興亜福祉財団）、石井敬子先生（神戸大学）に加わっていただきました。大沼先生には、来年度の大会準備委員会代表としてのお役目も兼ねていただいています。また、大会運営幹事を池田真季さん（東京大学大学院博士課程）にお願いしています。大会運営に関連するさまざまなご要望やご助言等がございましたら、是非、委員会メンバー宛にご一報いただければありがたく存じます。

当面の活動課題は、今年度で開催される第54回大会（沖縄国際大学）に関する大会準備委員会への支援と協力です。11月2・3日に大会が無事開催されたのちは、来年度の7月下旬に予定されている第55回大会（北海道大学）に向けた準備が本格的に始動します。前期の堀毛委員長のもとでの大会運営委員会の活動内容を振り返ると、発表申請・登録の方法に関する事項、大会参加費に関する事項、大会当日の託児所運営やTwitter利用に関する事項、台風や地震といった緊急時の対応に関する事項等々、さまざまなトピックスが議題にのぼっております。今期もこれまでの検討内容を踏まえ、円滑な大会運営のための検討を重ねる所存です。

秋の沖縄、夏の札幌と、素晴らしい地での開催が続きます。微力ながら、できるだけ多くのみなさまにご満足いただけるような大会運営を目指し、大会準備委員会との連携を深めて参りたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（むらもとゆきこ・東京大学）

第27期役員選挙結果報告

選挙管理委員長 外山みどり

第27期の役員選挙は、前回同様、オンライン投票と書面投票併用の形で、本年1月7日から2月1日までの日程で実施されました。なお当初、1名の会員から書面投票の希望が出されましたが、結局投票されませんでしたので、全てがオンラインによる投票ということになりました。

投票締め切り後、2月10日（日）にアカデミーセンター内の日本社会心理学会事務局にて、選挙管理委員4名（岡 隆、角山 剛、森津太子、外山 みどり）が、学会事務局の古川佳奈さん、第26期の事務局担当常任理事の今井芳昭氏の立ち会いのもと、開票を行いました。以下、開票結果をご報告いたします。

投票総数は384、投票率は25.6%（有権者数1502）でした。2011年に行われた第26期役員選挙の投票率が25.7%でしたので、ほぼ同率という結果でした。選挙区別の投票数、投票率は表1をご覧ください。今回もメールニュース等で、何回か投票を呼びかけましたが、前回とほぼ同程度の投票率に終わり、4人に1人しか投票しないという結果であったのは残念です。投票率の低さの背景には、い

くつかの問題点が考えられ、今後も方法の改善を含めて検討が必要のように思われます。

開票は会長、全国区理事、地方区理事、監事の順番で行いました。それぞれの区分での（最終時点での）次々点までの結果は、表2～8をご参照ください。なお規程に従い、得票数同数の場合には抽選によって順位を決定しました。開票時点で対応すべき問題として、第26期から継続の監事である釘原直樹氏が、地方区理事（関西・中部地区）に当選されるという結果になりましたので、理事と監事の両方に当選した場合には理事を優先するという規程に従い、釘原氏は地方区理事に異動、その後任として、前回選挙での次点であった本間道子氏を監事に繰り上げ当選としました（任期は釘原氏の残任期間の2年）。

開票終了後、当選者全員に就任の諾否を尋ねたところ、全国区理事当選の安藤清志氏と結城雅樹氏が就任を辞退されたため、開票時点での次点と次々点（全国区得票8位）のお2人を繰り上げ当選とし、あらためて最終的な次点、次々点を決定しました。さらに上記手続きによって、当初、地方区理事（中国・四国・九州・沖縄）の当選者であった山口裕幸氏が全国区に当選されたことになり、全国区と地方区両方に当選した場合には全国区を優先するという規程に従って、山口氏は全国区理事に異動、中国・四国・九州・沖縄の地方区理事は当初の次点であった浦光博氏を当選とすることになりました。

このように今回の役員選挙では、辞退による繰り上げ当選、監事から理事への異動とその後任の選出、地方区理事から全国区理事への異動と次点の繰り上げ、などの手続きがあり、理事、監事全員の顔ぶれが決定するまでに少し時間がかかりましたが、全体としては大きな問題はなく、続いて常任理事選出の段階に移りました。

表2にありますように、第27期会長には村田光二氏が選出されました（任期2年）。常任理事6名のうち2名は会長が指名すると定められており、編集担当常任理事には浦光博氏、事務局担当常任理事には岡隆氏が、村田会長から指名されました。そのお2人について、2月25日～3月2日に全理事によって、電子メールを用いた信任投票が行われ、お2人も信任されました。

次に、残りの常任理事4名を選ぶため、3月5日～12日に理事による互選が行われました。方法は前々回から電子メールによる投票となっています。この結果は3月14日（木）に学習院大学において、選挙管理委員2名と事務局古川さんによって開票され、表9のように、村本由紀子氏、今井芳昭氏、相川充氏、池田謙一氏の4名が当選となりました。常任理事の方々の就任挨拶は、この会報に掲載されているはずです。

（とやまみどり・学習院大学）

表1 第27期役員選挙 投票数

区分	有権者数	投票者数	投票率
会長	1,502	384	25.6%
全国区理事	1,502	384	25.6%
地方区理事(北海道・東北地方区)	111	35	31.5%
地方区理事(関東地方区)	731	184	25.2%
地方区理事(中部・近畿地方区)	490	126	25.7%
地方区理事(中国・四国・九州・沖縄地方区)	160	37	23.1%
監事	1,502	384	25.6%
*海外	10	2	20.0%

表4 第27期役員選挙開票結果(地方区理事:北海道・東北地方区)

氏名	得票数	順位	当選者
大沼 進	12	1	○
濱 保久	3	2	次点
飛田 操	3	2	次々点
小計	18		
次々点未満	12		
白票	5		
合計	35		

注:次点、次々点は抽選による

表2 第27期役員選挙開票結果(会長)

氏名	得票数	順位	当選者
村田 光二	115	1	○
池田 謙一	91	2	次点
亀田 達也	24	3	次々点
小計	230		
次々点未満	142		
白票	12		
合計	384		

表5 第27期役員選挙開票結果(地方区理事:関東地方区)

氏名	得票数	順位	当選者
沼崎 誠	26	1	○
外山 みどり	18	2	全国区に当選
藤島 喜嗣	17	3	○
相川 充	16	4	全国区に当選
向田 久美子	14	5	○
岡本 浩一	13	6	次点
宮本 聡介	12	7	次々点
小計	116		
次々点未満	300		
白票	136		
合計	552		

表3 第27期役員選挙開票結果(全国区理事)

氏名	得票数	順位	開票結果	最終結果
北村 英哉	75	1	○	○
橋本 剛	44	2	○	○
結城 雅樹	30	3	○	辞退
三浦 麻子	29	4	○	○
相川 充	21	5	○	○
外山 みどり	21	5	○	○
安藤 清志	19	7	○	辞退
竹澤 正哲	17	8	次点	○
山口 裕幸	17	8	次々点	○
高比良 美詠子	16	10		次点
大沼 進	14	11		次々点
小計	303			
次々点未満	356			
白票	109			
合計	768			

表6 第27期役員選挙開票結果(地方区理事:中部・近畿地方区)

氏名	得票数	順位	当選者	注
三浦 麻子	44	1	全国区に当選	
元吉 忠寛	40	2	○	
釘原 直樹	8	3	○	26期監事から異動
長谷川 孝治	7	4	次点	
池上 知子	7	4	次々点	
小計	106			
次々点未満	111			
白票	35			
合計	252			

注:次点、次々点は抽選による

表7 第27期役員選挙開票結果(地方区理事:中国・四国・九州・沖縄地方区)

氏名	得票数	順位	開票結果	最終結果
山口 裕幸	6	1	○	全国区へ異動
浦 光博	6	1	次点	○
坂田 桐子	3	2	次々点	次点
笹山 郁生	3	2		次々点
小計	18			
次々点未満	15			
白票	4			
合計	37			

注:得票同数の当選・次点・次々点は抽選による

表9 第27期常任理事選挙 開票結果

氏名	得票数	順位	当選者
村本 由紀子	14	1	○
今井 芳昭	12	2	○
相川 充	9	3	○
池田 謙一	8	4	○
山口 裕幸	7	5	次点
釘原 直樹	4	6	次々点
小計	54		
次々点未満	27		
合計	81		

表8 第27期役員選挙開票結果(監事)

氏名	得票数	順位	当選者	最終結果
今川 民雄	21	1	○	○
本間 道子	17	2	次点	○前回次点繰り上げ
村田 光二	13	3	会長に当選	
結城 雅樹	10	4	全国区理事に当選	
斎藤 和志	8	5	次々点	次点
亀田 達也	7	6		次々点
小計	76			
次々点未満	221			
白票	87			
合計	384			

第27期常任理事会・各委員会の体制

	新	旧
会長	村田光二	(安藤清志)
事務局担当	岡 隆	(今井芳昭)
編集担当	浦 光博	(唐沢 穰)
大会運営担当	村本由紀子	(堀毛一也)
広報担当	池田謙一	(池田謙一)
学会活動担当	相川 充	(遠藤由美)
渉外担当	今井芳昭	(唐沢かおり)
学会事務局幹事	山本真菜	(日本大学大学院)

1. 編集委員 (○印は理事)

委員長: ○浦 光博
 副委員長: ○林直保子
 継続メンバー: ○相川 充 (筑波大学)、大坪庸介 (神戸大学)、長谷川孝治 (信州大学)、○林直保子 (関西大学)、広瀬幸雄 (関西大学)、○森津太子 (放送大学)、村上史朗 (奈良大学)、安野智子 (中央大学)

新メンバー: 秋山 学 (神戸学院大学)、大江朋子 (帝京大学)、金政祐司 (追手門学院大学)、○外山みどり (学習院大学)、○三浦麻子 (関西学院大学)、森永康子 (広島大学)、○山口裕幸 (九州大学)

編集幹事: 柳澤邦昭 (日本学術振興会特別研究員・京都大学)

2. 広報委員

委員長: ○池田謙一 (同志社大学)
 継続メンバー: 小林哲郎 (国立情報学研究所)、宮本聡介 (明治学院大学)
 新メンバー: 清水裕士 (広島大学)、○三浦麻子 (関西学院大学)
 広報幹事: 范知善 (東京大学大学院)

3. 大会運営委員

委員長: ○村本由紀子 (東京大学)
 継続メンバー: 泊真児 (沖縄国際大学)、福島治 (新潟大学)、山入端津由 (沖縄国際大学)
 新メンバー: 石井敬子 (神戸大学)、○大沼進 (北海道大学)、片桐恵子 (日本興亜福祉財団)、○元吉忠寛 (関西大学)
 大会運営幹事: 池田真季 (東京大学大学院)

第26期常任理事の離任の挨拶

会長
安藤清志
 このたび、本学会の会長として2年の任期を務めさせていただき、「一会員」に戻りました。前の25期から通算4年になりますので、ようやく肩の荷を下ろすことができました、というのが正直な気持ちです。この間、

それぞれの担当領域で手腕を発揮していただいた常任理事の先生方をはじめ、さまざまな委員会の委員を務めていただいた理事や一般会員の方々、年次大会の開催をお引き受けいただいた先生方や学生の皆さんに、心から感謝の意を表したいと思います。
 会長としての最初の2年間は、本学会の

50回記念大会というイベントもあり、緊張の中にも明るい雰囲気でご過ごせたように思います。しかし、任期が終わろうとする3月に東日本大震災が起これ、また役員選挙の手續の中でミスも発生するという具合で、第26期は、それらの対応に頭を悩ませながらの出発となりました。しかし、皆様方の

協力のおかげで何とか乗り切ることができました。

会長としての仕事を始めるにあたっては、これまでの路線を踏襲しつつ、いくつかの活動を重点的に行う方針であることを以前の会報に書きましたので、自己採点も含めて今後の学会の方向性について記しておきたいと思います。まず、学会レベルで海外の研究者との交流を進めるべきであることを会報で述べました。これについては、まずは韓国の社会心理学会（韓国心理学会のディビジョン）と、お互いの年次大会で自由に発表できるような協定を結ぶことを考えていましたが、まだ実現していません。一つには、日本心理学会が韓国心理学会と5年前に研究協力協定を締結したことで、現在では両学会の会員がお互いの大会で発表できるようになっていることがあげられます。この制度との関係を考えながら、本学会と韓国の社会心理学会との関係を考える必要があります。日心のほうであと2年間仕事をする事になりましたので、可能なやり方をいろいろ考えて一会員として提案をしたいと思います。

「もっと社会へ！」を目標に、学会の広報を充実させることも、少しずつ続けてきました。幸い、この問題に強い川浦先生(25期)と池田先生(26期)に常任理事として広報を担当していただきましたので、学会ホームページが見やすくなり内容も充実してきました。まだほんの一部ですが、英語、韓国語、中国語のページも加わりました。もう一つ、広報ということでは、大震災の直後に立ち上げたリンク集を今後どうするかを検討すると同時に、そのほかの情報を学会から発信する仕組みを考えることを目的に「学会広報検討特別委員会」を設置しました。前の会報では、「発進準備完了」を宣言したのですが、まだ具体的に新たな情報を発信するまでには至っておらず、この点、反省しなければなりません。会長としての任期は終わりましたが、引き続きこの委員会の委員として留まらせていただき、少しでも進めようと考えています。幸いにして、池田先生が引き続き広報担当の常任理事を務められますので、これから2年間、広報はさらに充実することと思います。

会員の研究活動をさまざまな面で後押しするサービスは、たとえ利用者が少なくても必要に応じて検討していかなければなり

ません。昨年は新たに休会制度が定められ、事情があつて活動を休止する会員の便宜をはかることができるようになりました。会員からアイデアを寄せていただければ、これからも常任理事会で具体化してよりよい環境作りが進むことでしょう。

会員数で見ると本学会は「成長期」を終えた形になっていますが、会員の方々は学会の外でもますます貢献の場を広げています。日心で仕事をするようになり、多くの委員会で本学会の会員が委員として活躍していることを知りました。3年後に横浜で開催される国際心理学会議(ICP2016)の準備にも、何人かの先生が関わっていらっしゃいます。これからはますます、社会心理学の研究者が日本の心理学ワールドを盛り上げる場が増えていくことでしょう。私も一会員としてその輪に加わり、微力を尽くすつもりです。

改めまして、4年間どうもありがとうございました！

(あんどうきよし・東洋大学)

事務局長

今井芳昭

第26期の事務局長を務めました今井芳昭(慶應義塾大学)です。無事に任期を終えることができ、ホッとしております。これも安藤清志会長をはじめ、常任理事、理事、会員の皆様のおかげであると感謝しております。

今回は、活動記録に詳細が記されていますように、大会や公開シンポジウム、2か月に1回の常任理事会、年に1回の総会と理事会、そして、各種の学会賞や補助金制度の実施のほか、休会規程を新たに制定しました。それぞれの場面で事務局が何らかの形でかかわってきました。もちろん一人では処理しきれない事務量ですので、事務局幹事の結城裕也さん(現在は立教大学助教)や業務委託している国際文献社の古川佳奈さんにも大変助けていただきました。ありがとうございました。

事務局長を務めて感じたのは、学会を運営するというのは、結構、大変なことなのだと思います。今期の体験を通して始めて、今までの諸先生方、諸先輩方のご苦勞を知ることができました。2013年度からは強力な岡隆先生が事務局長を引き継ぐことになり、とても安心しております。会員の

皆様の引き続きのご協力をよろしくお願い申し上げます。

(いまいよしあき・慶應義塾大学)

編集担当

唐沢 穰

2年間にわたる編集担当常任理事を、何とか終えることができました。大会の総会等でも事あるごとに、くどいくらい申し上げていることですが、学会誌への投稿論文の審査は、編集委員をはじめ数多くの方々による、実に献身的なボランティア活動によって成り立っています。私が編集委員長を務めたこの間、計16名の編集委員の先生方にお世話になりました。この他、前の25期で委員の任期を終えられた後も継続審査論文の主査を続けてくださった先生方、主査からの審査依頼に快く応えて審査者(副査)の役割を担ってくださった多数の会員および非会員の方々と、数え上げれば切りがないくらい多くの関係者のご協力があったからこそ、各年3号ずつの学会誌刊行を果たすことができました。いつも投稿者のことを気かけながら審査のために奮闘いただいた皆さん、本当にありがとうございました。また、編集事務センター(国際文献)の高橋さん、川久保さんのお二人、それから編集幹事として常に業務を助けてくれた名古屋大学の竹橋(当時)、後藤の両氏の労苦にも心からお礼申し上げます。

私が編集委員長をお引き受けした2年前は、ちょうど学会誌『社会心理学研究』への投稿数が減少傾向にあり、掲載論文も少なくなるという問題に直面していた時期でした。私たち編集委員会はその主な原因が、審査の長期化にあると考え、迅速化のための取り組みを行いました。常に複数(どころか、3点も4点も)の審査論文をかかえながら、私から「迅速化のために〇〇を」といったメッセージを受け続けた各委員の先生たちは、本当にストレスの多い毎日だったことと思います。実際、ちょっとプレッシャーをかけすぎたかもしれません。しかし、それに(耐えて)応えていただいたおかげで、審査が極端に長期化した論文は、ほとんどなくなったと言ってよいと思います。これはひとえに、各委員と審査者の皆さんの犠牲的精神のたまものです。

編集委員会ではこの他にも、審査の方式についても検討を行いました。皆さんもご

存じのように、主査が審査結果を顕名で投稿者に伝え、その判断に対する責任を明確にするというのが、当学会の審査手続きの特徴です。しかしこれが、編集委員の負担を非常に重くしているという難点があるのも事実です。この方式の利点と問題点について、慎重に議論しました。また、ネット上での論文投稿システムの仕様についても、変更の必要性があるところを洗い出しています。いずれも、次期の編集委員会で引き続き議論していただくことになっています。

さて、すでに心理学のいくつかの分野では、若手の研究者も(いや若手こそが)英語で執筆した論文を海外の雑誌に投稿するのが当然のようになりつつあります。私は、これと同様に日本の社会心理学者も、今よりもはるかに多数の論文を国際的なレベルで発表していくことが必要であるという考えを持っています。そうすると、『社会心理学研究』のように掲載論文の圧倒的多数が日本語である雑誌の、存在意義がどこにあるのかという疑問が浮上します。実は私自身も、この疑問に対する明確な答えは得られないまま、今日に至っています。我田引水ではないのですが、折しも昨年度、当誌も長年補助を受けていた科学研究費(研究成果公開促進費)の趣旨に大きな変更があり、学会をあげて国際化への取り組みがいっそう強く求められる状況になりました。その変化に直ちについていくことができず、昨年度は助成申請を見送らざるを得ない事態を招いたことにつきましては、主な担当であった私の力不足を悔んでいます。この場をお借りして、会員の皆さまにもお詫び申し上げます。これは今後も、学会全体で議論と工夫を重ねていかなくてはいけない重要な課題のひとつと言えるでしょう。

学会賞(論文賞と出版賞)の選考も編集担当の任務のひとつです。ここでも、選考委員の先生方には、多大な労力を払っていただきました。重ねてお礼申し上げます。この選考方法についても、委員の負担をなるべく軽減させながら、優れた研究成果を学会として顕彰し続けていくための、何らかの変更を考える必要があるかもしれません。

青息吐息で任務を終えた割には、偉そうなことを書き連ねましたが、若い会員の比率が比較的高く、研究活動が活発に行われている当学会の成果公表の営みには、今後

も大いに期待が持てると考えています。そのような学会の基幹事業に関わる仕事をさせていただいたのは、私にとっても貴重な経験でした。ありがとうございました。

(からさわみのる・名古屋大学)

渉外担当

唐沢かおり

第26期の渉外担当常任理事を担当しておりましたが、このたび任期が終了いたしました。渉外担当の主要な仕事は、大学院生海外学会発表支援制度、及び、国際学会シンポジウム企画補助金制度の運営と支援対象者選考です。これらは、会員の皆様の国際的な活動を支援する制度として、2005年より開始されたものです。おかげさまでもちまして、この2年間に、シンポジウム企画補助につきましては計4件、大学院生海外発表につきましては計8名の方々に対して、活動支援を行うことができました。審査をご担当いただきました方々には、心よりお礼申し上げます。

一方で、これらの制度、とりわけ、国際学会シンポジウム企画補助金制度は、曲がり角を迎えているように思います。毎年応募者が少ない現状につきましては、総会でもご報告申し上げた通りです。この制度の改変につきましては、国際交流委員会にて議論を行ってまいりました。若手研究者海外発表支援制度への改変など、幾つかの案が提出されましたが、任期中に新しい制度の発足に至ることができず、今後の方向に関する議論も含めまして、第27期常任理事会に引き継いでおります。また、就任した時の課題として言及いたしました、積極的に応募していただくための広報や制度の整備、さらには、両制度を活用した国際交流の成果を、単に支援対象となった方だけではなく、より広く、学会全体に還元していくための方法などは、継続的に議論が必要な事項かと存じます。

また、これら支援制度以外に、日本心理学諸学会連合への協力、他学会との交流の促進も渉外担当の課題でした。いずれも、すでに多くの会員の皆様が「社会心理学」という領域を越えて成果をあげておられるという現状を踏まえ、それを充実させるためのサポートに学会がどう取り組むのか、ということが基本となります。学会として、実質的で実りある交流を生む仕組みをどの

ように支援できるのかという問題につきましても、引き続き、第27期でご議論いただければと思います。

なにやら、ご議論をお願いする課題ばかりになってしまいましたが、幸い、第27期渉外担当常任理事の今井先生は、第26期に事務局を担当しておられましたので、これまでの議論の経緯等、よくご存じです。私が至らなかつたところを引き継ぎ事項としてお願いしてしまったわけですが、より活発で意義のある国際的・学際的な交流に向けての制度整備・運営にご活躍いただけると確信しております。

最後に、改めて、これまでの活動に際しまして、ご協力いただきました皆様、また、第27期で学会運営に携わる皆様方に、感謝申し上げます。

(からさわかおり・東京大学)

学会活動担当

遠藤由美

26期の学会活動を担当いたしました遠藤です。学会活動の主な担当事項は、公開シンポジウムと若手研究者奨励賞の2つです。前任者の唐沢穰先生から引き継ぎをいただいてすぐに、その年の公開シンポジウムの開催が迫っているというスケジュールで、果たさなければならぬ任務をよく理解しないまま走り始めました。それからもう2年になります。この間、安藤会長と同期の常任理事の先生方、それに事務局の結城さんや国際文献の古川さんからご指南をいただきながら、何とか任務を終えることができました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

公開シンポジウムに関しては、2011年度は「消費の病理」(企画:池内裕美先生(関西大学))という現代社会の問題を鋭く切り取ったものでしたので、企業や消費者団体などから幅広いご参加をいただくことができました。2012年度は「医療の心理学」(企画:上野徳美先生(大分大学))というテーマで大分で開催されました。社会心理学の成果を広く社会に還元し、また学会大会が開催されない地域のニーズに応えたいという日本社会心理学会の願いの1つがこのような形で実現できたことを喜ばしく思います。企画者の上野先生には孤軍奮闘いただき、また当日は近隣から(と言っても、電車で数時間以上かかります)会員の方々が

駆けつけてくださり、いずれも頭が下がる思いでした。

他方、若手研究者奨励賞関連では、とくに大学院生の翌年度計画立案に間に合うように応募締め切りを11月から9月に時期を早め、また応募用紙を改訂し記載量を増やしました。後者については、応募する側は研究目的や計画をより十分説明でき、選考する側にとっては十分な判断材料が得られるというメリットを期待しました。「少々型破りでもいいから将来性のある力のこもった研究」と、時にはそれとぶつかる「よく準備された学術性の高い研究」とをどのよう基準に取り込むかについて、選考の場で大いに議論をし、選考委員の先生方の熱心なご議論をいただきましたが、確定的方針を見いだすところまでは至りませんでした。今後も引き続き、新常任理事、理事、それに会員のみならず全体でこの問題を考えていくことが求められるように思います。

学会活動を担当させていただいて、社会心理学会が構成員、研究領域やテーマ、持続可能性などの点においてバランスが取れたとても素晴らしい学会であることを改めて再認識する機会となりました。知識を生産するのは個人であって組織ではありませんが、組織は知識創造のためのよりよい条件を作り出す場としてとても重要です。今後益々相互の学問的刺激し合いを通じて発展していくことを心から願っております。

(えんどうゆみ・関西大学)

広報担当

池田謙一

第26期の広報担当をいたしました池田謙一です。社会心理学会の広報担当はじつは二度目で20世紀の末に2年間担当させていただき、そのときに学会のホームページを初めて立ち上げたという「因縁」があります。21世紀に入り、26期広報を担当して直ちに気づかされたのは、旧ホームページの改編にあたり、25期担当の川浦先生始め広報委員会の先生方が簡潔で美しいデザインを決めていただいていたことでした。26期が引き受けたときには、建物にたとえるなら残りは「内装」をするだけといった状態になっておりました。このことはたいへんに幸いでした。2年をかけまして、全体像を完成させ、また多言語化にも一歩を踏み出すことができました。遅まきながら

ではありましたが、着実に進められたことを、ともに喜びたいと思います。

20世紀末と比べて変化したことは、他にもあります。広報手段の多様化と、内向けの広報から外へと徐々に向いて来たことで

前者は、頻繁なる学会メールニュース、およびインターネット化された会報と学会ホームページによる情報の蓄積と伝達です。ツイッターも学会アカウント@jssp_prからしばしば発信しております。

後者、つまり学会から社会へ向けての発信は、東日本大震災の発生直後に自発的に始まったと言えるでしょう。前期の広報委員会の発案に社会心理学会メンバーや学会の外からも協力をいただき、ボランティアで「東日本大震災を乗り越えるために：社会心理学からの提言と情報」なるサイトを立ち上げ、社会心理学の研究者として、いまできることは何か、考えながら情報発信を積み重ねました。この外向きの流れを震災に限らず、本格化させなければなりません。広報委員会は日々の現業任務にしばしば流され、うまく進めえなかったことが反省点として残ります。

広報委員会のメンバーであった五十嵐祐さん、小林哲郎さん、三浦麻子さん、宮本聡介さんの各位、また広報幹事であった范知善さんに感謝を申し上げ、26期の任務を終わります。最後になりますが、学会の会報に寄稿して下さった多くの会員、賛助会員の方々、また日々、学会メールニュースに貴重な情報を寄せて下さった会員の方々、改めて御礼申し上げます。

(いけだけんいち・同志社大学)

大会運営担当

堀毛一也

おかげさまで無事2年の任期を終えることができました。まずは紙面をお借りして皆様に厚く御礼申し上げます。

前任の村田先生に、細かい点まで詳細にご検討いただいていたおかげで、今期は特に大きな問題もなく任期を終えることができました。委員としてご協力いただいた、小城先生、田中先生、福島先生、宮本先生、村本先生に厚く御礼申し上げます。いろいろと貴重なご提言をありがとうございました。村本先生には27期の担当常任委員としてひきつづきご活躍いただけることになり

ました。任期の残る福島先生共々、どうぞよろしくお願い申し上げます。幹事をお務めいただいた小林さんのご尽力にも厚く御礼申し上げます。

また、大会委員長や担当委員としてご協力いただいた、吉田俊和先生、北折先生、吉田富二男先生、藤先生、には、あらためて特段の御礼を申し上げます。名古屋大会、筑波大会とも、すばらしい大会運営でした。ご尽力賜りました諸先生方本当にありがとうございました。全面的にお手伝いすべき本委員会が何の協力もできませんで誠に申し訳なく存じます。

さらに、本年の54回大会をお引き受けいただきました大城先生、山入端先生、泊先生はじめ沖縄の先生方、本当にありがとうございました。円滑な実施にむけて、在住の諸先生方が何度もミーティングをもっている様子、本当にありがたく存じます。11月どうぞよろしくお願い申し上げます。また、北大の亀田先生には55回大会の開催をお引き受けいただいております。本来ならあちこちに開催のお願いに回らねばならないところ、貴重なお申し出を頂戴し誠に有り難く存じます。7月という良い時期の札幌ということで、何うのがとても楽しみです。

申し訳ないことに、56回大会以降の開催は本委員会の任期中には決定できませんでした。1校に単独で引き受けいただくには大会規模が大きくなりすぎているように感じられます。今後の大会運営の方針につきましては次期委員会の論議に期待したいと思いますが、委員会から要請がありました折には、是非快くご対応いただくか、建設的な代換案を頂戴できれば誠にありがたく存じます。

感謝の言葉の羅列に終わってしまいましたが、これ以外に書きようがありませんので、なにとぞご寛容ください。2年間本当にありがとうございました。

(ほりけかずや・東洋大学)



第26期のメンバー

前列左から、唐沢か、安藤、今井、唐沢み
後列左から、池田、堀毛、学会事務局・古川佳奈



第27期のメンバー

前列左から、村本、村田、岡、相川
後列左から、事務局幹事・山本真菜、池田、浦、今井、古川

* * * *

若手会員、声をあげる

博士学位取得までの道程

大高瑞郁

この度は、貴重な機会を与えてくださり有難うございます。博士学位取得の御祝儀として頂いた機会ですので、学位取得に至るまでの過程についてお話しさせて頂こうと思います。これから学位を取得される皆さんに、反面教師としてご活用頂ければ幸いです。間違っても参考にしたり、安心材料として引用したりしないよう充分ご注意ください。

学位取得にかかる制度は各大学院ないし各研究室で異なるかと思いますが、私が学位を取得するためには2013年3月までに大学院係に博士学位申請論文を提出する必要がありました。以下、私が学位記を手にするまでに辿った審査過程を記します。

- 2009年3月23日 第1段階審査<構想について>
- 2010年3月2日 第2段階審査<データについて>
- 2010年3月31日 満期単位取得退学
- 2011年5月31日 かおり先生に原稿提出
- 2012年2月8日 かおり先生に文献展望部分のみ原稿提出
- 2012年7月23日 かおり先生に原稿提出
- 2012年8月30日 審査委員の先生方に初稿提出
- 2012年11月29日 第3段階審査<改稿点について>
- 2012年12月31日 審査委員の先生方に改稿提出
- 2013年2月21日 審査委員の先生方に再改稿提出
- 2013年3月1日 大学院係に博士学位申請論文を提出
- 2013年3月14日 第4段階審査<最終審査>
- 2013年4月2日 審査委員の先生方に最終稿提出
- 2013年4月18日 研究科委員会にて承認
- 2013年5月23日 かおり先生から学位記授与

こうして改めて振り返ると、構想から最終審査まで、実に4年の歳月が流れており、かおり先生から学位記を頂く際に思わず口を衝いて出たのは「永かったあ」の一言でした。かおり先生にも「永かったなあ」としみじみされました。

最も混迷を極めたのは、原稿化の段階、とりわけ文献展望部分の原稿化の段階で、文献展望の難しさを痛感しました。また、構想を箇条書きすることはできていても、原稿にする段階で行間が隙だらけなことを再認識し、隙間を埋める議論を考え出すことに四苦八苦していたように記憶しています。この時期は最も鬱々悶々としていましたが、諸先輩方に相談に乗って頂き励まして頂いて、どうにかこうにか乗り切ることができたように思います。

文献展望以降の部分の原稿化にあたっては、論文全体の一貫性を保つことに必死だったように思います。また、この頃は審査委員の先生方へ初稿を提出する期限が目前に迫っており、深夜もしくは明け方にタクシーで帰宅したり、研究室に泊ったりと、正に体力勝負の時期でした。免疫力を保つため、抗生物質や野菜ジュースとお友達になったのもこの頃です。

審査委員の先生方に初稿を提出してから最終審査までは、かおり先生に最短距離をご用意頂き、際どい綱を一気に渡り抜けた感があります。どこかの過程でふらつくと綱から落ちて期限に間に合わない危険を伴いますので、これから学位を取得される皆さんには、是非とも期限に余裕を持って臨まれることをお奨め致します。

最後になりますが、指導教員の唐沢かおり先生、審査委員の安藤清志先生・池田謙一先生・浦光博先生・村本由紀子先生、二次分析という研究手法をご教示くださった石田浩先生に、この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。また、心が折れた際、寛大な心で受け止めてくださった先輩の繁榊江里さん・林純姫さん・村上史朗さん・針原素子さん・尾崎由佳さん・菅さやかさん

にも心より感謝申し上げる次第です。ここにお名前を挙げさせて頂いた方々を初め、お世話になった全ての方々のお陰で無事、学位を取得することができました。本当に本当に有難うございました。

(おおたかみずか・山梨学院大学)

風邪と咳喘息の話？

柳澤邦昭

4月に入ってから、なかなか咳が止まらない日々が続いた。特に、寝る前はひどく、朝方まで眠れないことが度々あった。風邪を引いたと思い、耳鼻咽喉科にいったら風邪薬をもらう。でも、全くよくなる。それが1週間くらい続き、ほぼ睡眠時間ゼロで、目が真っ赤のまま実験に明け暮れていた。しかし、マスクをしているとはいえ、咳ゴホゴホの目が充血している実験者では、妙な実験者効果が出てしまうと思ひ、今度は呼吸器内科へ。咳喘息と診断され、治療薬をもらった結果、すぐに治ってしまった。

恐るべし治療薬。とはいえ、もともと咳の症状だけで風邪と勝手に判断していた自分がイケないわけ…。

そんな体調不良の中行っていた実験は“死”関連刺激に対する脳機能イメージング研究。近年、神経科学的研究手法を取り入れる試みは、様々な学問領域で見受けられ、飛躍的發展を遂げている。当然、社会心理学も。こころの働きのしくみを行動だけでなく、脳内の神経活動も併せて評価することは、心理学の魅力的な説明・解釈に生理学的視点に基づいた信頼性と妥当性の付与に結びつく。ただし、それ以上にこの手法に魅力を感じる点を筆者の研究を通じて紹介する。

社会心理学の枠組みにおいて、“死”に関する研究は存在脅威管理理論 (Greenberg *et al.*, 1994; Solomon *et al.*, 1991) が非常に有名である。このモデルが提唱され、はや20年が経過した。他の動物と違い、人は“死”が予測不能であり、不可避であることを認識している (Becker, 1971, 1973)。ゆえに、人は“死”を恐れるという (存在論的恐怖)。人固有の恐怖の存在は、研究者を惹きつけ、この存在論的恐怖に打ち勝つための多様な防衛反応が提唱された。

2012年、とある Running Head のついた論文が発表された (Tritt *et al.*, 2012: Social Cognition)。“What's so special about death?”。そして論文の最後はこう締めくくられている。“Death is not so special”。簡単に内容を紐解くと、存在脅威管理理論で提唱されている防衛反応は、ほかの脅威 (心理的欲求) でも生じ、防衛反応が死特異的ではなく、より一般的な不安モジュールに根差しているという。モデルの根幹を揺るがす内容である。

上記の議論は、人間を他の動物と切り離れた存在として考えるのか、あるいは高度に進化した生物延長上のヒトとして考えるの

かに結びつく点で、非常に重要かつ興味深い議論であるものの、最も大切な議論が欠けている。それは、防衛反応に重きを置くため、肝心の存在論的恐怖という現象を蔑ろにしている点である。これには理由がある。従来の心理学的手法では、こころの働きを行動から推測するため、この場合、防衛反応の観点から存在論的恐怖の存在を推測する必要がある。この“推測”には問題が潜む。たとえば、“死”以外の実験操作で防衛反応が生じた場合、論理の破綻を来すだろうし、事実そのような道筋からこの議論は始まっている。さらに言えば、その防衛反応は副次的な産物である可能性が十分に考えられるにも関わらず、逆推論的方程式に則ればそれが正しく見えてしまうのも確かである (咳は風邪を拗らせても生じるが、咳喘息でも生じる。だからと言って、風邪と咳喘息は一緒ではない)。

要するに、従来の心理学の基盤に根差した手法だけでは、この議論は究極的には収束することは不可能であり、最適解を得ることは出来ない。そこで、神経科学的手法の出番である。行動が生じる前段階、もっと言えば、こころの働きを構成する神経基盤に焦点を当てることで、改めてこころ…というよりも“死”関連刺激を処理する“最中”の脳活動から防衛反応を推測する。とりわけ、一般的な不安に関する神経基盤の検討はこれまでに多くの研究が蓄積されており、それらの神経基盤の観点から存在論的恐怖が他の恐怖や不安と一線を画するものなのかどうか検証可能である。この検証により特定された神経基盤と防衛反応を結び付けて検討することで、防衛反応の引き金となっている神経活動パターンが、死特異的なものなのか、そうでないのか明らかにすることが出来るだろう。

長い歴史の中で、オリジナルのモデルが提唱され、それに関するミニセオリーの乱立と他のモデルとの差異化や統合が図られるといった一連の流れは、少なからず見受けられる。こうした流れの中でモデルが成熟することもあるのかもしれないが、停滞とも見て取れることもある。神経科学的手法は、そのような停滞を打破する強力な武器になり得るだろう。従来の研究の論争に終止符を打とうとする野心家、行動指標の羅列と解釈に息苦しさを感じている心理学者、撮像と画像解析 (ときに PC のフリーズ) の繰り返しの日々に耐え得る研究者、このようなカンダタの痛恨の一撃も恐れぬ Lv.20 越えの冒険家には、ぜひこの研究手法を勧めたい。とりわけ、社会心理学者はその手法を巧みに扱えるアイデアを有し、ある種の特権が付与された魅力的存在であると筆者は考える。僧侶や魔法使いがいくら頑張っても賢者には成れないが、なぜか遊び人が成ってしまうかのように。

(やなぎさわくにあき・京都大学・学振 PD)

社会心理学を支えていただいている方々：その8

(公財)日本興亜福祉財団

片桐恵子

1. 財団小史

弊財団は1991年7月25日に日本火災海上保険株式会社 (現日

本興亜損害保険株式会社) の創業百周年事業の一端として、厚生省 (現厚生労働省) と文部省 (現文部科学省) の共管のもと設立されました。設立当時の日本社会は未だバブル期にあり、企業の

メセナ活動などが注目され、盛んに企業の冠公演などが開催されていた時期でした。

しかし、「高齢化社会」への突入を間近に控えた時期である日本社会のためには、これからは高齢者福祉を推進するべきであるという当時社長であった故佐野喜秋氏の考えに基づき、高齢者福祉に貢献するという目的のもとに日本火災福祉財団（現日本興亜福祉財団）が設立されました。

1994年に日本社会は“高齢化社会”の指標である高齢化率14%を超えましたが、財団設立20周年にあたった2011年には23.3%を超えて、世界で唯一“超高齢社会”の段階に至っており、弊財団の果たすべき社会的役割は今後さらに増すばかりであると考えております。

また、設立当初は財団法人でしたが、2008年の公益法人制度改革3法施行を受け、より高齢者福祉の増進に寄与すべく2012年4月に公益財団法人に移行いたしました。

2. 業務内容

現在は以下の4つの事業を行っております。

(1) 在宅で高齢者を介護する家族の交流及び研修支援事業

認知症高齢者を介護する家族が、交流し、学び、お互いの苦しみを分かち合うことによって希望が与えられ、また、介護で大変な緊張を強いられる家族に一時の安らぎの場を提供するとともに介護のレベルアップを図ることを目的としています。現在、公益社団法人「認知症の人と家族の会」の本部及び支部と協力し、認知症高齢者及び介護援助者による宿泊を伴う研修・交流会を支援しています。その対象者は今まで延べ13,300名余にのぼり、介護家族に対して大きな希望を与えています。



(2) 介護福祉士養成を目指す学生への奨学金支給事業

日本においては福祉のマンパワーの不足が常に問題となっています。よって、マンパワーの育成に資するべく、介護福祉士をめざす学生で、学業・人物ともに優れており学資の支弁が困難と認められる者に奨学金を給与し、介護福祉人材の育成を図ることを目的としています。

活動開始以来、奨学金支給の対象となった学生は累計で約218名にのぼり、卒業後、全国各地の特別養護老人ホーム、病院等で活躍しています。

(3) ジェロントロジー（老年学）研究助成事業

高齢者や高齢社会をめぐる諸問題を明確にし、この解決に向けての基盤となるジェロントロジー（老年学）、特に社会科学分野に関する研究に対し助成事業を行っております。

全国の大学、研究所、教育機関、高齢者福祉施設の現場等を対象に公募し、助成を実施しています。

対象となった201件の研究の成果は、「ジェロントロジー研究報告」としてVol.1からVol.10まで発行し、全国の研究諸機関へ配布しています。



(4) 社会老年学事業

高齢化の進むスピードが欧米社会に比べて格段にはやい日本社会ですが、社会老年学の研究は欧米の研究に対して立ち遅れが目立つ状況にあることを鑑み、ジェロントロジー研究の一層の充実を図るため1998年10月1日に社会老年学研究所を設立し、社会老年学研究及び調査、情報提供をはかる活動をしています。

高齢社会の抱える問題に関する様々な研究を行い、豊かな高齢社会の構築に資することを目指しております。



3. 財団と日本社会心理学会にまつわるエピソード

財団と日本社会心理学会とのかかわりはいささかパーソナルなことから書き起こさなければなりません。上記の社会老年学研究所の設置の際には、担当者たちはアカデミックな世界になじみのない損害保険会社の社員、当時財団設立業務を担当していた筆者を含め、そもそも研究の世界のことがまったくわからないという状況にありました。どなたか研究者の方に研究員としてきていただくようお願いすればいいのだろうとは考えたものの、それではちょっとつまらないのでは、ということになりました。今思えば、バブルが去ったとはいえ、まだそんな検討をできる余裕があったということです。

たまたま筆者が社会心理の出身者であり、きっとこいつは金儲けに向かないと会社の人に思われていたのではないのでしょうか、大学に戻って研究者にならないかというオファーをうけました。しかし当人にとっては大きなキャリアの変更になりますので簡単には受けられなかったのですが、いろいろ考えた結果、それもいいだろうと思い大学院に戻る決心をいたしました。

当時の飽戸先生に研究生として受け入れていただけたものの、

現役の大学生の時は統計から逃げきっていたので、いざゼミにでてみてもクロンバックの α って何? また授業でも「認知」という言葉がもてはやされているなど、すっかり社会心理の内容も様変わり。さらに東大の社会心理には社会人枠がないので、現役の学生の方と一緒に受験しなければならず、しかも社名による受験でしたので落ちるわけにはいかず...。多々のプレッシャーを乗り越え、ようやく大学院生になったとき、飽戸先生はちょうど退官されたのですが、幸い池田先生に指導教官を引き受けていただきました。その頃池田先生は学会の事務局を担当されており、事務局員をさせていただくことになりました。その際、学会の予算がなかなか大変である様子や、弊財団としても研究所としても高齢社会の問題を社会心理学的アプローチにより検討することの意義を思い、賛助会員にならせていただき、現在に至っております。上記にご紹介しましたように財団の事業の一つにジェロントロジー(老年学)研究助成事業がありますが、これは社会科学をター

ゲットとするものです。最近はいにく予算の制約上隔年実施となっておりますが、研究助成を募集する際には社会心理学会にもご案内をさせていただいております。しかし、助成額が小さいためかはいにく社会心理の方からのご応募は少ないというのが現状です。

筆者はその後社会心理で学位をいただき、社会心理学的な観点から高齢社会問題の研究を行っております。老年学は長らく身体が不自由だったり病気があったりで医療や介護の対象としての高齢者、という観点からの研究が中心でしたが、近年は大多数を占める健常高齢者についての関心が高まっており、医学や歯学の研究者など他分野の研究者とともに学際的な研究を実施するに際しては、社会心理学的な視点が求められていることを国内外で強く感じる事がとみに最近多くなってきました。ぜひ学会の皆様にも高齢社会の問題にもっと目を向けていただければと願っております。

(かたぎりけいこ・日本興亜福祉財団)

* * * *

会員異動

(2013年3月16日～2013年5月31日)

■新入会員

《正会員》

・一般会員

浅川雅美(文教大学健康栄養学部准教授)、伊藤ゆかり(大阪大学未来戦略機構第一部門特任教授)、魚野翔太(京都大学大学院医学研究科日本学術振興会特別研究員)、大塚光太郎(NPO法人子どもグリーンサポートステーション職員)、川上典李子(川上典李子事務所代表/公益財団法人三宅一生デザイン文化財団)、菊池はじめ(医療法人社団誠和会長谷川病院執行役員・副診療部長)、岸俊行(福井大学教育地域科学部准教授)、小泉尚子((株)応用社会心理学研究所調査研究アシスタント)、小林進一郎(ユニ・チャーム株式会社プランナー)、近藤芳樹(東京ガス(株)都市生活研究所主幹研究員)、佐藤剛(グロービス経営大学院大学教授)、杉山顕寿(日本原子力研究開発機構東海研究開発センター主査)、鈴木伸哉(名古屋大学事務職員)、高橋健太(愛知みずほ大学瑞穂高校非常勤講師)、戸田山和久(名古屋大学情報科学研究科教授)、八田純子(愛知学院大学心身科学部准教授)、藤枝静暁(川口短期大学こども学科准教授)、古谷文男(株式会社応用社会心理学研究所調査研究ディレクター)、眞嶋良全(北星学園大学社会福祉学部専任講師)、松島公望(東京大学大学院総合文化研究科助教)、山形伸二(大学入試センター入学者選抜研究機構特任助教)、

山田純弥(東京都立久留米西高等学校教諭)、曹美庚(阪南大学国際コミュニケーション学部教授)

・大学院生

相田直樹(東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室)、新井さくら(東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系)、荒井俊行(早稲田大学大学院人間科学研究科)、有吉美恵(九州大学大学院心理学研究科行動システム専攻)、飯干隆寛(名古屋大学大学院環境学研究科)、石田有紀(久留米大学大学院心理学研究科人間行動心理学専攻)、泉愛(広島修道大学大学院人文科学研究科社会心理学研究室)、市川玲子(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、伊藤彬(一橋大学大学院社会学研究科)、井上裕香子(東京大学大学院総合文化研究科)、射場元気(関西大学大学院心理学研究科)、請園正敏(明治学院大学大学院心理学研究科)、遠藤伸太郎(立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科)、大嶋千尋(大妻女子大学大学院人間文化研究科)、小川響(大妻女子大学大学院人間文化研究科)、尾崎拓(同志社大学大学院心理学研究科)、甲斐恵利奈(法政大学大学院人文科学研究科)、加藤仁(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、金井雅仁(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、加村圭史朗(北海道大学大学院文学研究科行動システム科学講座)、紀ノ定保礼(大阪大学大学院人間科学研究科安全行動学研究室)、木村駿介(立教大学大学院コミ

ュニティ学研究科)、京野千穂(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、九島紀子(立正大学大学院心理学研究科)、久保昌平(広島大学大学院総合科学研究科)、コブラダマテイ(名古屋大学大学院教育発達科学研究科社会心理学研究室)、小松英美子(早稲田大学大学院人間科学研究科)、櫻井良祐(東京大学大学院人文社会系学術研究科)、澤成都子(広島大学大学院教育学研究科社会心理学研究室)、澤山郁夫(岡山大学大学院教育学研究科)、新谷健介(立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科)、須恵明音(玉川大学大学院脳情報学研究科)、須山巨基(北海道大学大学院文学研究科行動システム科学研究室)、ゼールミリアム(名古屋大学大学院環境学研究科)、関向諒太(東北大学大学院文学研究科心理学研究室)、高松礼奈(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、館野洋輔(東京大学大学院人文社会系研究科)、田中理恵子(早稲田大学大学院人間科学研究科)、富永仁志(京都大学大学院人間・環境学研究科)、トムソンロバートジョン(北海道大学大学院文学研究科行動システム科学研究室)、中川裕美(広島修道大学大学院人文科学研究科)、中山真孝(京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座)、畠中智恵(青山学院大学大学院教育人間科学研究科)、哈布日(筑波大学大学院人間総合科学研究科社会心理学研究室)、林祥平(神戸大学大学院経営学研究科)、藤井貴之(玉川大学大学院脳情報学研究科)、古川善也(広島大学大学院教育学研究科社会

心理学研究室)、村川文梨(一橋大学大学院社会学研究科)、森 美月(一橋大学大学院社会学研究科)、山口真奈(神戸大学大学院人文学研究科心理学研究室)、山田 学(一橋大学大学院社会学研究科)、山西悠平(北海道大学文学研究科行動システム科学講座)、兪 叶韵(神戸大学大学院人文学研究科心理学研究室)、吉崎雅基(関西大学大学院総合情報学研究科)、吉野伸哉(一橋大学大学院社会学研究科)、吉野優香(東京学芸大学大学院教育学研究科)、渡辺光咲(玉川大学大学院脳情報学研究科)、徐 文臻(名古屋大学大学院教育発達科学研究科社会心理学研究室)、林 萍萍(神戸大学大学院国際文化学研究科)、POTHISITTHIPORN TIPPAYARAT(神戸大学大学院国際文化学研究科)、申 知元(青山学院大学大学院国際政治経済学研究科)

■退会者

浅井定雄、浅野智美、有馬もと、五十嵐睦、石原秀男、伊藤朝陽、植村勝彦、掛礼逸美、柏谷博貴、加藤恭子、北川歳昭、木村通治、河嶋章生、小林良子、佐々木超悦、佐相邦英、佐藤峰子、島崎哲彦、白石彩乃、菅原郁夫、鈴木志のぶ、竹尾和子、田村和久、戸田京子、富澤和香子、野中陽一朗、原口恭彦、馬 天雪、真柄希里穂、松本 学、松山早希、叶 少瑜、渡辺正恵

■所属変更

湯川進太郎(筑波大学人間系心理学域)、樋口匡貴(上智大学総合人間科学部)、池田謙一(同志社大学社会学部メディア学科教授)、吉田俊和(岐阜聖徳学園大学教育学部)、松尾 睦(北海道大学大学院経済学研究科)、大谷保和(筑波大学医学医療系社会精神保健学分野助教)、永野光朗(京都橘大学健康科学部心理学科)、田原直美(西南学院大学人間科学部心理学科)、相川 充(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、山田一成(東洋大学社会学部)、山際勇一郎(首都大学東京都市教養学部准教授)、北川歳昭(就実大学教育学部教育心理学科)、伊奈正人(東京女子大学現代教養学部国際社会学科)、広田すみれ(東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科)、野寺 綾(福山大学人間文化学部准教授)、長沼貴美(創価大学看護学部小児看護学領域)、迫田裕子(東亜大学

人間科学部専任講師)、古谷嘉一郎(北海道大学経営学部経営情報学科)、敷島千鶴(帝京大学文学部心理学科准教授)、尾崎由佳(東洋大学社会学部社会心理学科准教授)、安部幸志(関西国際大学人間科学部)、菅さやか(愛知学院大学教養部講師)、小森めぐみ(千葉大学文学部行動科学科助教)、本田周二(島根大学 教育・学生支援機構キャリアセンター助教)、結城裕也(立教大学現代心理学部心理学科助手)、宮崎弦太(立教大学現代心理学部)、三船恒裕(高知工科大学講師)、稲増一憲(関西学院大学社会学部専任講師)、王 戈(京都産業大学教育支援研究開発センター大学職員)、桂(赤坂)瑠以(川村学園女子大学文学部心理学科)、吉武久美子(長崎純心大学人文学部児童福祉学科)、山本志都(東海大学文学部英語文化コミュニケーション学科)、浅野智美(東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科)、塚脇涼太(比治山大学現代文化学部社会臨床心理学科講師)、石井辰典(東京成徳大学応用心理学部健康スポーツ心理学科助教)、山中祥子(池坊短期大学環境文化学科准教授)、井邑智哉(精華女子短期大学講師)、東垣絵里香(東洋大学人間科学総合研究所奨励研究員)、松本良恵(玉川大学脳科学研究科研究費研究員)、縄田健悟(京都文教大学総合社会学部)、栗田季佳(名古屋大学大学院環境学研究科)、油尾聡子(宮城学院女子大学学芸学部特任助教)、奥西有理(岡山理科大学工学部生体医工学科/教養教育センター准教授)、板山 昂(神戸学院大学人文学部研究員)、野澤義隆(立正大学)、森裕樹(新潟医療福祉カレッジ専任講師)、湯浅将英(湘南工科大学工学部コンピュータ応用学科)、竹澤正哲(北海道大学大学院文学研究科准教授)、増井啓太(日本学術振興会特別研究員(PD))、福田詩織(株式会社CIJ)、池田安世(京都教育大学大学院教育学研究科大学院生)、内田遼介(大阪大学大学院人間科学研究科大学院生)、石川泰地(名古屋西部児童相談所主事)、塩谷芳也(日本学術振興会(大阪市立大学))

『社会心理学研究』掲載予定論文

■第29巻第1号(2013年8月刊行予定)

《原著》

小侯謙二「性犯罪被害者に対する第三者の非難と心理的被害の過小評価に影響を及

ぼす要因：被害者の社会的尊敬度と暴力的性に対する女性の願望に関する誤解」
石黒 格「社会心理学データに対する分位点回帰分析の適用：ネットワーク・サイズを例として」

《資料》

田中大貴「ゲーム法を用いた場合の最後通告ゲームにおける意図の効果」
山脇望美・山本雄大・熊谷智博・大淵憲一「攻撃性の顕在的・潜在的測度による攻撃行動の予測」
原田知佳・土屋耕治・吉田俊和「社会的自己制御における高次/低次解釈と熟慮的/遂行的マインドセットの効果」
及川昌典・及川 晴「抑制, 表出, 反芻傾向と感情プライミング効果の関係」

■第29巻第2号(2013年11月刊行予定)

《原著》

小野田竜一・高橋伸幸「内集団ひいき行動の適応的基盤：進化シミュレーションを用いた検討」
田崎勝也・二ノ宮卓也「日本人のレスポンス・スタイル：構造方程式モデリングを用いた探索的研究」
熊谷智博「集団間不公正に対する報復としての非当事者攻撃の検討」

《資料》

塩谷尚正・中原洪二郎・土田昭司「地域コミュニティにおける集団内関係志向的認知と集合効力感および参加協力意図との関連：奈良市における質問紙調査」

編集後記 第26期に引き続き、会報幹事を担当させていただくことになりました范知善です。これからも、より読みやすくきれいなレイアウトの会報になるように会報幹事として頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1件(1回あたり)1,000円
(後日事務局より請求書をお送りします)